

のぞき穴の日常



Concept

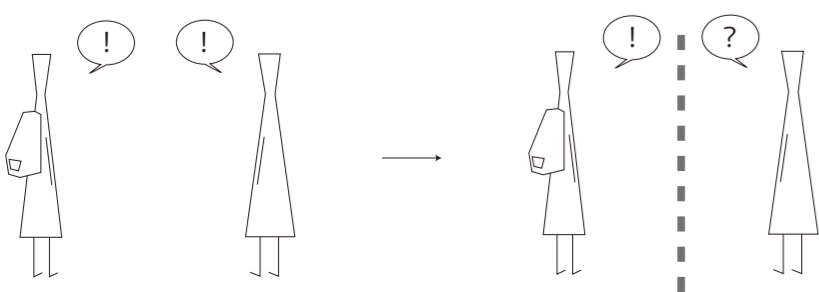
「私は日常の愛おしさを思い出すためにも日常を飛び出さずには居られないのである。」

「旅」の中で、私たちは自らの日常とは異なる日常=異日常に魅せられる。その異日常の体験こそが旅の醍醐味であるが、現地で暮らす人々の日常と旅人にとっての異日常のバランスが崩れると、旅先は旅人に合わせた日常=非日常へと変化してしまう。

観光と言う名の「街の生き残り戦略」は作られた魅力であるからして一時的な生き残りを実現できる可能性があるが、トップダウン的なものではなくボトムアップ的な観光の手段としての異日常があり得ると考える。

Proposal

旅人は旅先で異日常を求めるが、旅人が異日常に入りすぎて観光地化してしまうと、そこは非日常となってしまう。そこで旅人の異日常と現地の人々の日常の境界面としての穴を提案する。

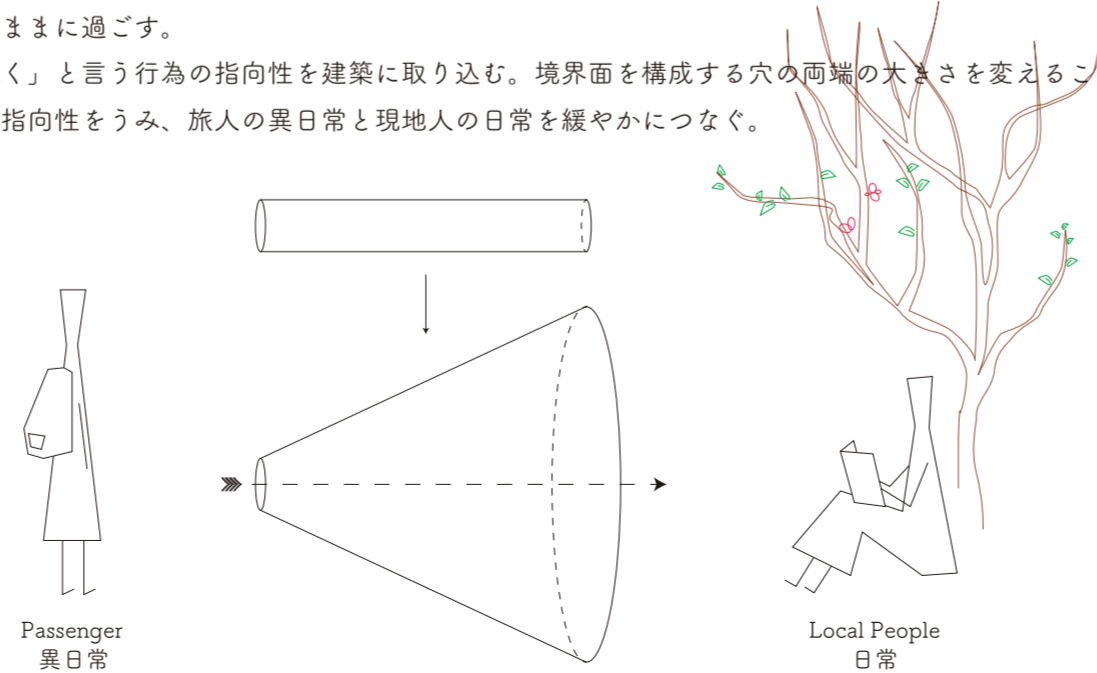


Design

見る⇔見られると言う関係の間に指向性をもたらず行為として、「覗く」という行為がある。

穴に対して近い方は見る側となり反対側を広い視野で捉えることができるが、穴から遠い方は穴を通して見える視野が狭いため反対側を把握することは難しい。また、「覗く」と言う行為は自分は隠れているところから様子を伺う行為であるから、旅人は異日常をよりそれとして見ると同時に、現地の人々は日常をありのままに過ごす。

この「覗く」と言う行為の指向性を建築に取り込む。境界面を構成する穴の両端の大きさを変えることによって指向性をうみ、旅人の異日常と現地人の日常を緩やかにつなぐ。



Architecture

穴を反復させることにより微分的な曲面を描く建築を構成し、その内部空間には異日常が放射状に広がる。外部からは誰が見ているか、誰に覗かれているのかわからないため、その思考が排除される。

地元の人と旅人がダイレクトな繋がり方ではなく、距離感を保った緩やかな繋がりをこの建築によって作りたい。

江戸時代の鎖国を経て明治の文明開化して以降、西欧文化を取り込んできた日本だからこそ、「日本的なもの」ではないがアイデンティティとなるエレメントが数多く存在する。地方都市においてそのエレメントは観光資源として過疎化による衰退現象の打開策になるかもしれないが、観光に大きく舵を切ることによって本質的な「日本てきなもの」は失われてないだろうか。資本主義一辺倒になって「おもてなし」をはじめとする和の心を忘れてはないだろうか。

私は日本人として日本人でありたいと思う。そのための建築を提案します。

